不可視のものを可視化する -マイケル・ルイス小論-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2017-05-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 斎藤, 英治 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/18693

明治大学教養論集　通巻523号
（2017・1）pp. 1-10

不可視のものを可視化する

── マイケル・ルイス小論 ──

斎　藤　英　治

「盲点」（Blind Spot）とか「死角」（Blind Side）と呼ばれるものがある。視界の外側に位置するか，何かに視界をさえぎられているために，目に見えない，あるいは目に見えにくい領域のことだ。

マイケル・ルイスの著作を読んでいると，この書き手はほんとうに盲点や死角にこだわるノンフィクション作家なのだ，と感じる。彼の扱うジャンルのほうは，ウォール街を舞台にした経済ものとスポーツものの二つに分かれているので，一貫性があるとは必ずしも言えない。しかし，死角や盲点にこだわっているという点では，この作者はほぼ一貫した姿勢を保ちつづけているのだ。

映画化もされた『ブラインド・サイド』（2006, 映画化の邦題は『しあわせの隠れ場所』2009）は，タイトルからして，まさにそんな彼の特徴を示す作品だった。

この本が扱っているブラインド・サイドとは，アメリカン・フットボールのクォーター・バックがボールを投げるときにできる死角のことだ。ボールを投げるとき，人は自然に体を横向きにするので，クォーター・バックの場合 ── ほとんどは右利きなので ── どうしても左側のサイドが見えにくくなる。そのサイドから相手のディフェンスに殺到されると，クォーター・バックは恐ろしく無防備な状態になる。このクォーター・バックの左サイドを死角と呼んだわけだ。

マイケル・ルイスによれば，このクォーター・バックの左サイドが近年のアメリカン・フットボールでは戦術的に重視されてきたという。左サイドから相手に殺到されたとき，クォーター・バックはすぐにそれを察知できないため，ハードなタックルを受けて重傷を負う（ときには選手生命を絶たれる）ことが多かったのだ。そこで，このクォーター・バックのブラインド・サイドを守る特殊な能力を持つディフェンスの選手が戦術面で重視されるようになった。体が大きく強靭なだけでなく，俊敏さにも恵まれた有能な選手だ。『ブラインド・サイド』は，そんな稀有な運動能力に恵まれた黒人青年のドラマティックな人生を描いた本だった。

この本で，マイケル・ルイスは，クォーター・バックの死角をめぐる攻防が，アメリカン・フットボールの戦術をどう変えてきたかを説明していた。そしてこの死角にスポットを当てることで，ふだんは想像もつかなかったアメリカン・フットボールの複雑な戦術を可視化しようとしていたのだ。

繰り返すが，これは，マイケル・ルイスのノンフィクション作家としての特徴をよくあらわしている。経済界をテーマにしようが，スポーツ界をテーマにしようが，彼が好んで描くのは，われわれがふだん見逃してしまう，あるいは見えているのに見ようとしない盲点でありであり死角なのだ。

そのことは，これも映画化された『世紀の空売り』（2010，映画化の邦題『マネー・ショート　華麗なる大逆転』2015）についても同様だ。この本は，サブプライム・ローンの暴落に端を発するアメリカの経済危機を扱った本だ。しかし，ルイスが試みているのは，たとえば，同じマイケルという名を持つ有名なドキュメンタリー映画作家マイケル・ムーアが映画『キャピタリズム――マネーは踊る』（2009）でやっていることとはかなり異なっていた。ムーアが映像を通して描いたのは，1パーセントの人間が富を独占するアメリカ社会の格差や，金持ちや一部の圧力団体の利益にばかりおもねるアメリカ経済のシステムの欠陥だった。『シッコ』（2007）でアメリカの医療問題を批判したように，『華氏911』（2004）でアメリカの対イラク戦争を批判したよう

に，『キャピタリズム』でも，彼は格差社会を是認するアメリカのシステムを痛烈に批判していた。

しかし，マイケル・ルイスが『世紀の空売り』で注目しているのは，やはり「盲点」であり「死角」なのだ。たしかに，ここでも，ムーアの『キャピタリズム』同様，ウォール街の大手投資銀行がサブプライム・ローンで返済能力のない人々を食い物にしたことは，一種の「詐欺」または「マルチ商法」として厳しく批判されてはいる。だが，ルイスがそれ以上に関心を持つのは，第二次ブッシュ政権下にあって，不動産バブルに誰もが浮かれていたときに，誰もが見ようとしなかった点に注目することで，不動産バブルの崩壊を予測し，そちらに資金を賭けて大もうけをした男たちのほうなのだ。

もっともユニークなのは，株のトレーダーだったマイケル・バーリという人物だろう。彼は若いころは医師だったのだが，株の世界に魅せられて医学の世界を去ったという変り種だ。そして一般には評価の低い優良株を地道に探すことで，確実な利益を得るタイプのトレーダーとして，その着実さがプロのあいだでも評判になり，多くの資産家の資金の運用を任されるようになった。しかし，2002年ごろから，彼は債券市場での異変に気づくようになる。本来ならローンを組めないような移民労働者が立派な家を（それも複数も）ローンで購入していたりする現実に違和感を覚えだすのだ。丹念に調べていった結果，彼は銀行が杜撰なローンを行っている事実をつきとめ，このようなローンのシステムが長続きせず，早晩住宅価格の暴落を招くだろうと予見する。そこで，資産家たちから任された資金を投入して，暴落したときの保険となる債権 —— サブプライム・ローンが暴落すると儲かる仕組みの債権 —— を買い集めだすのだ。

不思議なのは，このような暴落を予測して，そちらに賭けた人たちが彼以外に数えるほどしかいなかったという事実だ。住宅の価格は過去50年以上にわたって5パーセント以上下がったことがなかったため，そもそも誰もそんな事態を想定していなかったらしい。また，格付け機関が質の悪いサブプ

ライム・ローンにまでトリプルＡの評価を与え続けたことも，業界全体の楽観論につながっていたようだ。

この本には，業界の多くの人たちがバブル景気に浮かれるあまり，いかにそこに潜むリスクに気づかなかったかが，「目」や「見る」といった視覚にまつわる言葉を使って表現されている。

> ほどなくリップマンが気づいたのは，サブプライム・モーゲージ市場の醜悪な実態をいちばんわかっていそうな人間たち…（中略）…こそ，この数年間目にしてきたことを，いちばんわかっていない人間たちだということだ。不思議だが，確かな事実だった。市場の近くにいればいるほど，その愚かしさが目に入りにくくなる。(144)

> この連中は，妄想に突き動かされているのか，それとも，わかっていてやっているのか？　モーゼスは，この業界にいる人間の大部分が私欲に目をくらまされ，自分たちの生み出したリスクを見ていないのではないかと考えていた。(237)

> 例えば，三人は常々，格付け機関がなぜ，変動金利のサブプライム・モーゲージに裏付けされた債権に対してもっときびしい目を向けないのか，不思議に思っていた。サブプライムの借り手の多くは，冷蔵庫が故障したぐらいのことで債務を滞らせてしまう境遇にある。…（中略）…そういうローンの多くが焦げつき始めていたというのに，サブプライム債の値動きはなかった。なぜなら，不可解なことに，ムーディーズとＳ＆Ｐが頑としてサブプライム債に関する公式見解を変えようとしなかったからだ。(252-3)

> アラン・グリーンスパンは史上最悪の連邦準備制度理事会議長として，

評判は落ちる一方だろうな。あまりに長いあいだ，あまりに低く金利を設定したことなんて，序の口だよ。サブプライム市場で何が起こってるか知りながら，目をそむけていたのは，消費者がどんな目にあおうと痛くもかゆくもないということさ。(336)

能力があったかなかったかは別として，彼らは起こっている状況に対して盲目に近い状況にあったというわけだ。あるいは，彼らは見えていても，あえて見ようとしないことを決め込んでいたのかもしれない。

そんな風潮のなかで，暴落を予測した者たちは，マイケル・ルイスの言葉を借りれば，「例外なく変わり者だった」という（166)。彼らは，一匹狼のトレーダーや，若い3人が立ち上げた投資ファンドのメンバーなど，大手投資銀行や大手の投資ファンドのエリート・トレーダーたちに比べたら泡沫的な存在にすぎなかった。ただし，当時の金融界の常識を疑ってかかる才能を持っていたようだ。

さらに少人数の一団――十人以上二十人未満――は，回りくどいことをせず，数十億ドルに及ぶサブプライム・モーゲージ市場全体，ひいては世界的な金融システムが破綻するほうにすんなり賭けた。そのこと自体が，特筆すべき事実だと言える。予見可能な大惨事なのに，目を向けたのは限られた数の投資家だけだったのだ。(165)

マイケル・ルイスによると，そのなかでも最初にサブプライム・ローンの矛盾に気づいたバーリは，幼いころにめずらしい型の癌のために左の眼球を摘出された経験を持つという。「片目を失った少年は，ほかの誰とも違う見かたで世界を眺めることに」なったというが（63)，そのような身体的な障害がかえってほかの人たちの死角に目を向ける才能を与えていたのかもしれない。彼はサブプライム・ローンの価格が暴落すれば儲かる立場にあったわ

けだが，金融危機を引き起こす可能性が高いのに，ウォール街がそれに気づかないことに対して困惑もしていたようだ。

> ……わたしは終始，信じられない思いでいました。二〇〇七年六月になる前に，誰かが差し迫る事態に気づくはずだと思っていたんです。もしほんとうに，六月の送金データを見て突然気づいたのだとしたら，“ウォール街のアナリスト”って，一日じゅう，いったい何をしているんでしょうね。(292)

『世紀の空売り』は，サブプライム・ローンの暴落に端を発する金融危機が，じつは何年も前から予測可能だったこと，そして実際にそれを予測して大儲けした少数の変わり者がいたことを描いた本である。そして彼らの碧眼ぶりを賞賛すると同時に，エリート・トレーダーたちの本来は鋭い目も節穴だったことを指摘し，さりげなくアメリカの金融界を風刺している。マイケル・ムーアのアメリカ批判を直球に喩えるならば，マイケル・ルイスの変化球的なこの本は，われわれに複眼的な見方を教えてくれるように思える。

改めて強調しておくが，マイケル・ルイスは，リーマン・ショックで大儲けした少数の変わり者たちを倫理的に批判しているわけではない。むしろ，経済や金融界の盲点や死角に目を向けることができた彼らの才能のほうを称揚している。たしかに，リーマン・ショック後，たくさんの国が，多くの人々が，その後遺症に苦しんだ。その金融恐慌で儲けるなどというのは罰当たりとも言えるかもしれない。しかし，時代風潮や業界の常識に流されずに，冷静に事態を分析していた少数派の勇気と大胆さに彼は共感を覚えている。ウォール街の大手投資銀行や投資ファンドから連邦準備局までが当然と見なしていた金融システムに死角があったことに気づき，さまざまなプレッシャーや不利な状況のなかで姿勢を貫いたからだ。そこに，彼はアメリカ的な個人主義の良き伝統を見ているのかもしれない。そのあたりが，いかにもマイケ

ル・ルイスという作家らしい。

ところで，マイケル・ルイスの本を読んでいて，映画の分野で連想した本があった。フランスの脚本家・劇作家のジャン＝クロード・カリエールが書いた *The Secret Language of Film*（映画の秘密の言語）という本だ（英訳版，Faber & Faber, 1995)。これはルイス・ブニュエルの映画やフィリップ・カウフマン監督の映画『存在の耐えられない軽さ』(1987）などの脚本で知られるカリエールが書いた映画論だが，その冒頭に，ユニークなエピソードが紹介されていたのだ。

第１次大戦後，アフリカのイスラム系の国で，その国の宗主国だったフランスの植民地政府は，植民地の族長たちのために映画の上映会を開くことにした。フランスは当時世界をリードする映画大国だったから，その驚異の科学発明品を見せて，未開人たちを感心させようとしたようだ。

しかし，あいにく，招かれた族長たちはイスラム教の信者で，彼らにとって，神の創造物である人間の顔や形を描くことは伝統的に禁じられていた。彼らは礼を失しないように上映会に参加はしたが，上映が始まると目をつぶってしまった。そして上映中，目を決して開けなかったという。「彼らはそこにいたが，そこにいなかった。存在はしていたけれど，何も見ていなかった」

このユーモラスなエピソードを紹介した後で，カリエールはこう続ける。

> ときおり，わたしは思うのだ。映画に行くときのわれわれはこれらのムスリムたちとじつは大差がないのではないかと。彼らとは違って，われわれは劇場の暗闇のなかでちゃんと目を開けてはいる。少なくとも，自分ではそう思い込んでいる。だが，自分たちのなかに，何かのタブーや習慣や特質や妄執を持っており，それらのせいで，われわれもまた目の前で揺らぐ光と音の帯のすべてから，少なくともその一部から，目をそむけているのではないだろうか。(Carriere: 4)

たしかに，現代の観客は偶像崇拝を禁じた昔のイスラム教徒の頑迷さを笑えないかもしれない。現代人もまた同時代の風潮や，流行の言説や，昔受けた教育や，同調圧力や，政治的な思惑などのために，目をそむけたり死角の存在に鈍感になっていたりするかもしれないからだ。

また，そもそも人間の目が万能からはほど遠いことも忘れてはならないだろう。そもそも，映画とは目の錯覚がもたらした技術だと言える。映画は，サイレントならば1秒間に16コマ，音声映画なら一秒間に24コマの速さで連続的に映される静止画像を見るときにできる残像現象によって動画を見ているように思われる装置だが，それはあくまで人間の目の不完全とも言えるメカニズムを利用した発明なのだ。時間的に，すべてのディテールを確認する能力は人間の目にはないし，瞬きをする瞬間も当然ある。また，視野にしてもあくまで限定されていて，大きなスクリーンに映される映像の細部をつつがなく確認できるわけではない。

また，たとえ視界のなかにあるものでも，何らかの理由で目に入らないものが存在する。サスペンスやユーモラスなシーンで強いエモーションにとらわれた観客は，その感情に圧倒されてしばしば画面の細部などには目がいかなくなるし，たとえ見えていても意識化されないことが多いのだ。

それとは反対に，映っていないはずのものを見てしまうという現象も起こりうる。有名なエピソードとしては，アルフレッド・ヒッチコックのスリラー映画『サイコ』（1960）をめぐる騒動が挙げられる。プロダクション・コードがまだハリウッドの映画製作を厳しく規制していたこの時期 ── その一方で，時代風潮が大きく変化し，ヨーロッパ映画などが性的にも刺激的な映画をつくってハリウッドの脅威となっていた時期 ── ヒッチコックは『サイコ』で有名なシャワー・シーンを撮影した。コードは当初から「完全なヌードは決して許されない」と謳っていたから（Leff & Simmons: 285），ヒッチコックはヒロインのジャネット・リーの乳首が写らないように細心の注意を払ってこのシーンを撮影した。しかし，すばやい編集のせいで（そしておそらく

は殺人が間近に迫っているというサスペンスのせいで），プロダクション・コード・アドミニストレーション（日本でいう映倫）の委員長だったジェフリー・シャーロックの目には，そこに完全に人気女優のヌードが写っているように見えた。ヒッチコックは，それが目の錯覚による誤解にすぎないことを証明しなくてはならなかった。このエピソードはサーシャ・ガバシ監督の伝記映画『ヒッチコック』（2012）に詳しく描かれているが，人間の目は写っていないものを見てしまうことがあることを示唆する好例であるように思う。

しかし，そういった視覚器官としての目の不完全とも言えるメカニズムにもまして重要なのは，同時代の風潮やその時代の常識などのために，映っているものから目を背けてしまいがちだという事態だろう。その観客の目を画面から背けさせる社会的・政治的・心理的な抑圧の存在 —— つまりは観客の盲点や死角 —— を可視化することが，映画研究のひとつの任務なのではないだろうか。マイケル・ルイスの本は，そんなことを考えさせる点でも刺激的なのだ。

前述したように，マイケル・ルイスのノンフィクションは，おもに経済界とスポーツ界で起こっているのにあまり気づかれない「不可視の現象」をテーマにしてきたことと言える。『フラッシュ・ボーイズ　10億分の1秒の男たち』（2014）では，株や債権の取り引きにおいてスピードがますます重要になってきていることを説明し，ナノ・セコンド（10億分の1秒）のアドバンテージを得るために光ケーブルを自前でシカゴからニューヨークへ敷こうとする男たちがいることも紹介される。まったく人間の五感ではもはや察知できないスピードで金融界は成り立っているのだ。そもそも，彼を有名にした代表作の『マネー・ボール』（2003）は，データの独創的な分析によって野球選手の実力を何とか可視化しようとしたオークランド・アスレティックスのオーナーたちの物語だった。

ルイスの本は，多くの場合テーマが中心で，主人公らしい主人公が出てこ

ないことが多い。だから，映画化は困難なはずだが，すでに3作が映画化され，どれもかなり見応えのある作品になっている（いずれも何らかの形でアカデミー賞を取ったり，候補に選ばれている）。もしかしたら，不可視のものを可視化するというルイスのテーマが，映画の製作者たちの意欲をかきたてるのかもしれない。

彼の本は，他人と違うところに目をつけることによって大成功した男たちを称えるビジネス書にときとして似てくる。その意味では，変わり者ながら，独自の発想で成功をつかんだ者たちを美化した昔ながらの伝記の流れにあるとも言えなくはない。ただ，ひとつだけ異なるのは，彼が異端の成功者たちを通じて，現代社会において目に見えにくい，あるいは人がともすれば目を背けてしまう現象を取りあげていることだろう。そして現代人の目が必ずしも万能ではなく，「盲点」や「死角」がいつもあることを気づかせてくれることだろう。そこに彼の関心はあると思うし，またそこが彼の作品が現代の読者にとって刺激的な理由なのだ。

参考文献

マイケル・ルイス『ブラインド・サイド』（藤澤将雄訳，ランダムハウス講談社，2009）

マイケル・ルイス『世紀の空売り』（東江一紀訳，文芸春秋，2010）

マイケル・ルイス『フラッシュ・ボーイズ　10億分の1秒の男たち』（渡会圭子，東江一紀訳，文芸春秋，2010）

マイケル・ルイス『マネー・ボール』（中山宥訳，早川書房）

Jean Claude Carriere, *The Secret Language of Film*（Faber & Faber, New York, 1995）。

Leonard J. Leff & Jerold L. Simmons, *The Dame in the Kimono*（Anchor Books, New York, 1990）

（さいとう・えいじ　法学部教授）

※『世紀の空売り』からの引用は，東江一紀氏の訳文を使わせていただきました。